

阪神大震災（1995年3月号掲載・岡田 幸宏）



5時46分の大地震が発生し、私が救助隊として活動した震災で一番思い出のある現場について書きたいと思う。

5時50分頃から7時30分頃までの1時間40分の間に消防署前のアパートを最初に中山手通2丁目周辺でアパート・マンションと5対象、計20名の生存者を救出する。

7時30分頃、現場責任者の中谷係長の一旦署に帰って来いとの指示があったので、一旦帰署しようとしていた時、萬寿殿前にて住民(若い男性)に呼び止められ、「向こうのアパートが潰れ中に2人埋まっている」と強引に腕を引っぱられ連れていかれる。

大正銀行の裏手に差し掛かると付近一帯の木造の民家・アパートがすべて倒壊していた。

その中で〇〇荘という古い木造のアパートの一階が完全に潰れ、アパート入り口付近に女性が両手を合わせ祈っている姿が見られたので「どうしましたか」と尋ねると、「1階の一番端の部屋に息子が埋まっています」とのことだった。私は「わかりました、すぐ救出します」と言ったあと隊員3名で倒壊している1階部分で「誰かおるか。どこや」と声を掛けながら中の人の反応を窺った。

まず最初に「はい、ここです」と元気な男性の声が返ってきた。「だれや」「〇〇〇〇です」「消防署や。今から助けに行くから待ってけよ」すぐに入口の母親に声が聞こえたと伝え、我々3名では、手が足りないと判断し、道路に避難している住民に「誰か協力してください」とお願いすると20歳ぐらいの男性4名と40歳ぐらいの男性1名計5名が「手伝います。協力します。」と名乗りあげてくれた。「誰かおるか」と反応を待っていると中央付近から女の人の声で「私らここに居ます」「何人おるねん」「私ら二人とおばさんです。しかし、おばさんがタンスの下敷きで今にも死にそうなんです。早く出してあげてください」

私ともう1人の隊員2名が中央の3名を担当し、もう1名の隊員は、高校生を担当させ、協力者には瓦礫の除去の補助に当てさせた。

今にも2階部分が崩れそうな1階部分の瓦礫を少しずつ取り除き奥へと進入していった。

作業している間も余震が数回襲ってきており、建物が「ミシミシ」と音が鳴る。その度、2階が潰れたら我々3名は、死ぬんやろなと思いつつ余震の恐怖と人命救助という使命感との狭間での救出活動だった。

強カライトを照らし「このライトの光がわかりますか、見えますか」「見えます」との声の方向に瓦礫を除去し、子供、母親の順で親子 2 名を作業開始から 1 時間 15 分かけて無事救助した。

母親が泣きながら「おばあちゃんが、おばあちゃんが・・・」と我々に訴えていた。

私は、1 分でも早く助けなければとその時は思い、余震の恐怖はなく早く助けるぞというように気持ちに変化していた。

隊員 1 名を親子の居た住居部分に進入させ、おばあさんの確認をさせるも「おばあさんの姿が見えません」との返事。「タンスはあるか」「あります」というやり取りがあり、タンスの物入れ部分を取り除き、型枠部分を破壊し、おばあさんを救出したのが作業開始から 1 時間 40 分。

おばあさんは自力歩行ができず担架もないので毛布にくるみ、協力者に消防署まで運んでもらった。この時、本署から 1 回目の伝令が来て「係長があと何分かかかるか要救助者が何人」といった内容だった。「あと 2 名くらいだと思う。時間は 30 分ぐらい」と答えた。

まだ高校生は建物の中で隊員が検索していた。更に「誰かおるか」と反応を試みる。「はい」とかすかな男の人の声が聞きとれた。

これ以上、建物横からの進入は無理だと判断し、2 階部分から縦の進入方法に切り替える。

声の位置と2階部分の間取りを確認した後、畳をはぎ床板を取り除き、もう一度、声の反応を試みるも声の位置が少しずれている。ライトの光を当てても見えないとの反応、声の方向からして押入れの下ぐらいと判断し、作業再開。この時、本署から2回目の伝令が来た。「係長から一旦帰署せよ」との内容だった。

私は一旦1人で帰署することを隊員に伝え、その場を離れた。

係長に報告した後、もう一度〇〇荘に向かう。

2階に上がり、押入れの床板を取り除きライトの光を当てると「見えます」との反応があった。

この時ぐらいに高校生を救出したと隊員から報告を受け、3名で瓦礫を少しずつ取り除き頭の形が見えた時、「おじさん、ようがんばったな。もう少しの辛抱やですぐ出すで」と励まし救出したのが作業開始から2時間30分も過ぎていた。

次に隣の部屋に行くと、30歳くらいの男性と〇〇荘の大家さん2名が2階中央の畳をはぎ床を取り除く作業をしていた所だった。「人が居るんですか」「おるんや、俺の親や、はよ出したらんかい」と我々3名に詰め寄ってきた。「どこですか」「この下や」「どの辺ですか。すぐ出しますから」

位置的に先ほどと押入れ下ぐらいだろうと判断し、押入れの床板を取りはずし、瓦礫を少しずつ除去するとベットに寝ている状態の母親を確認する。母親の腹部には、2階部分の梁が乗った状態発見するも、すでに死亡と判断できる状態だった。

この時が初めて私の震災での死亡者との出会いだっただ。

息子が「お母さん」と顔を撫でながら、その場に泣き崩れ一言「大事に扱ってください」と言い残し、この場から姿が見えなくなっていた。

この一言にふと我に返り、もし私が同じ立場で身内が発見され、消防隊が生存者優先との理由を述べて、その場を立ち去ろうとしたら、「なんで身体の一部が見えているのに救出してくれないんだろう」と思い、消防を恨むかもしれないと思った時、これは何が何でも出さなければ、出してあげないといけなかった。

現在、持ってきているのこぎり、検索棒、バールでは対応できないので署に道具を取りに行かせ、油圧ジャッキなどを持ってきて、梁部分と一階床との間にジャッキを固定し、間げきを作ろうと試みるも、びくとも動かない。

それではベットの足を切断しベット自体、低くすれば間げきができると試みるもベットの足が切断できない。毛布を引っぱってもダメ、いろいろな方法を試すも時間のみ経過し、救出することができない。救出できない自分自身への苛立ち、すでに母親救助に3時間を経過し、〇〇荘に5時間近く要している。もう我々のできる限界にきている。

息子さんに会って我々は、これだけがんばったけど今の資器材では、限界ですと打ち明けようと私自身の気持ちが弱気になってきた。この場を見切ろうとしている。また周りには、潰れた建物の中に生存の可能性のある人がたくさんいる。この場を見捨てるのではなく大型機器(重機)が到着次

第戻ってくるんだ。それまで他の人を一人でも多く救出したい。させてほしいと思うようになり決断し始めている自分がそこにいた。

息子さんを探すも、なかなか見つからない。しかし、この言葉を伝えなければ立ち去れない。いつ見つかるか分からない息子さんを待つわけにもいかない。周りに助けを求めている人が大勢いると思った時、毛布を母親にかぶせている私がいた。私は救助隊になってから隊員の時、隊長になった現在に至るまで、このように途中で止めたことがなく、たとえ死亡と判断できる状態でも救出してきた私が今、その場から立ち去ろうとしている。

私は救助隊として救助のプロとして失格かもしれない。あの時、私は一人、その場に残って息子さんに会い、一言説明し、詫びれば良かったかもしれない。

この一つの現場が今まで何 100 人という人の命を救出し何 100 人という人の生と死に直面してきた私の心にいつまでも残るだろう。